

# 気管支喘息患者の環境因子に関する 二、三の考察

高 橋 艶 子\*  
笠 井 和\*\*

## I ま え が き

気管支喘息の本態はアレルギーであるが発作の誘因としては内的、外的諸因子があげられている。例えば遺伝的因子、身体的因子、気象的因子、感染、環境因子、人間関係等があり、これらが生体に影響してその平衡状態を破ることによりアレルギー反応を惹起し、発作を起すとも言われているがその機序については不明な点が多い。私共は先に気象的因子と発作誘発の関係を調べたが、今回は患者をとり巻く親、家族等との人間関係、児童の心理的状态及びその住居等との関係を調べたのでここに報告する。

## II 方 法

アンケートによる家庭周囲の環境調査と田研式親子診断テスト。個々の患者には田中ビネー法による知能テスト及び少数の者に乳幼児性格テストを行なった。

## III 対 照

昭和 43 年 10 月より 44 年 9 月迄に東京女子医大小児科アレルギー外来に訪ずれた百 100 余人の中の、男子 39 名、女子 39 名、の喘息患者児である。

## IV 環境、及び素因

a) 年齢及び性別は、第 1 表に示す如く 1 才～15 才迄で、4 才～5 才は 15 人、8 才～9 才は 17 人でこの年齢が一番多い。

第 1 表 性別、年齢別人数

| 年齢別<br>性別 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5  | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 計  |
|-----------|---|---|---|---|----|---|---|---|---|----|----|----|----|----|----|----|
| 男         | 1 | 2 | 2 | 3 | 8  | 2 | 2 | 5 | 8 | 4  | —  | 2  | —  | —  | —  | 39 |
| 女         | — | — | 1 | 2 | 2  | 4 | 3 | 3 | 1 | 1  | 1  | 1  | —  | —  | 1  | 20 |
| 計         | 1 | 2 | 3 | 5 | 10 | 6 | 5 | 8 | 9 | 5  | 1  | 3  | —  | —  | 1  | 59 |

b) 同胞数及び出生順位は、第 2 表に示すごとく 1 人は 14、2 人は 19、3 人は 16、4 人は 6 となり、3 人迄が圧倒的に多い。順位は、第 1 子 32、第 2 子 20、第 3 子 4 となり、

\* 東京女子体育大学

\*\* 東京女子医科大学

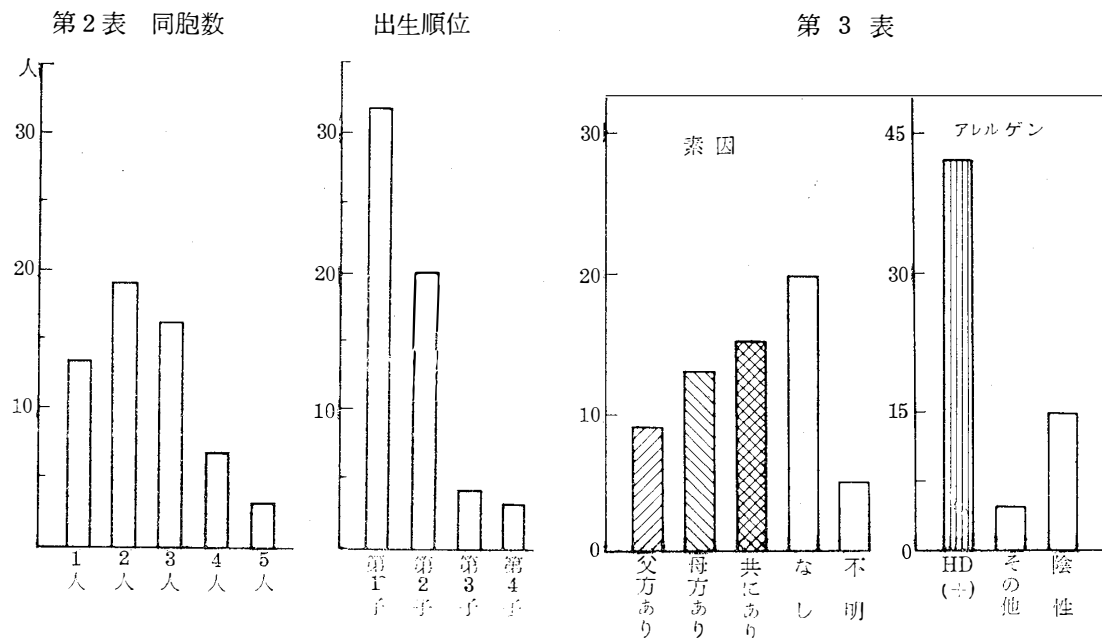
第2子第3子でも男あるいは女ではじめてというのが18あり、末子が15で、最近の傾向として子供数が少くないので当然とも思われる。

c) 両親の年齢は父は48才-28才、母は42才-26才で、32才-35才が最も多かった。

親の職業は会社員、公務員、銀行員、医師、教員、勤人41、勤めてない人18である。母親が仕事を持っているのは唯の3人で、旅館、煙草小売、箏曲教師であって大多数は家庭にいる母親であった。

d) 住居は住宅地が多く、木造普通の家、畳の生活で、商店街、工場地帯は少数で経済状態は比較的有福なものが多かった。

e) アレルギー性の素因のあるもの、第3表に示すごとく父と母ともに39で、アレルゲンテストによる家塵陽性は43あり、この点からも特異的療法として減感作療法を適切に行なう必要があると思われた。



f) 知能指数の平均は、112で大体普通よりちょっと良い程度であった。一般に喘息児は知能の高い者が多いと言われているが、本調査では、それほどでもなかったのは、137もよい者もいる反面、92位の者もあり、中には能力があるのに途中で投げる者もあって、低く出たと思われる。患者のテスト態度から見て、大部分が母親の依存的であり消極的であることが認められた。

### V 親子関係

田研式親子診断テストは児童生徒用、両親用で、児童用は喘息児により記入され、両親用はその子供の親たちにより記入されたのであるが、外来の患者であるために、指示が不徹底で、子供のみ記入したもの5、両親だけが記入したもの31、母親、または父親だけが記入したもの4、両親と子供がともに記入されているもの13であった。そのともに記入されているテスト結果の内、その親が見た子供の性格を第4表に示すと。

第 4 表

| 親が見た子供の性格      |   | 子供の自己評価      |   |
|----------------|---|--------------|---|
| あきっぱい          | 2 | やりっぱなし       | 2 |
| 甘えんぼう, 我儘      | 3 | 甘やかされている, 我儘 | 3 |
| 言うことを聞かない, 反抗的 | 3 | 反抗的          | 3 |
| 非社交的神経質        | 5 | 非社交的, 劣等感    | 5 |

あきっぱい 2, 甘えんぼう, 我儘 3, 言うことを聞かない, 反抗的 3, 非社交的神経質 3で, 子供の自己評価は, やりっぱなし 2, 甘やかされている, 我儘 3, 非社交的, 劣等感 5で, ほぼ同一で, 子供は案外に適切に自己を見つめていると言える。

次にその親子診断テストの結果から両親のテスト結果と子供の結果とがほぼ同じ結果のもの A グループ。両親と子供の結果にくいちがいの有るもの B グループとした。第 5 表に示すごくとである。

第 5 表

|       |                  |   |
|-------|------------------|---|
| Aグループ | 両親 = 子供<br>同じ    | 9 |
| Bグループ | 両親 × 子供<br>くいちがい | 4 |

結果の同じもの 9, 結果にくいちがいのあるもの 4であった。

次に第 6 表に示すごとく A グループの父親は, 過保護, 溺愛, 干渉が 78%, きびしい感心が無い 22%, 母親は, 可愛がって甘やかしている 100%, まったくの保護のみである。

第 6 表 A グループ 親

|   |    |                 |     |   |    |                                   |      |
|---|----|-----------------|-----|---|----|-----------------------------------|------|
| 父 | 保護 | 過保護<br>溺愛<br>干渉 | 78% | 母 | 保護 | 可愛がって甘やかしている<br>過保護<br>甘やかすが自信がない | 100% |
|   | 拒否 | きびしい<br>感じがない   | 22% |   | 拒否 |                                   |      |

第 8 表 A グループ 子供

|   |    |                         |     |   |    |                  |      |
|---|----|-------------------------|-----|---|----|------------------|------|
| 父 | 保護 | 甘やかす<br>溺愛でうるさい<br>干渉する | 56% | 母 | 保護 | 干渉が多い<br>溺愛でうるさい | 100% |
|   | 拒否 | 厳格で甘くない<br>うるさくない       | 44% |   | 拒否 |                  |      |

第 7 表は子供のテスト結果では, 父親は甘やかす, 溺愛でうるさい 56%, 厳格, あまりうるさく言わない 44%。父親が甘やかしていると思うほど子供は甘く感じていない。母親はいろいろとうるさく干渉する, 溺愛でうるさい 100%で A グループは, 子供と両親

親が一致している。

個々のテスト結果からも、母親は父親にまかせ考えが複雑でなく一貫している。

第8表 B グループ 親

|   |    |         |     |   |                 |     |
|---|----|---------|-----|---|-----------------|-----|
| 父 | 保護 | 過保護     | 25% | 母 | 全体に手をかける<br>過保護 | 75% |
|   | 拒否 | つきはなしいる | 75% |   | あまりうるさくない       | 25% |

第9表 B グループ 子供

|   |    |                        |     |   |    |                         |     |
|---|----|------------------------|-----|---|----|-------------------------|-----|
| 父 | 保護 | 干渉が多く<br>溺愛            | 55% | 母 | 保護 | 過保護<br>溺愛               | 50% |
|   | 拒否 | 不安があり、つきはなす<br>おこったりする | 50% |   | 拒否 | 心配して甘やかしたりする<br>おこったりする | 50% |

第8表に示すごとく B グループの父親は過保護 25%，つきはなししている，無感心，しつけがきびしい 75%，母親は父とは反対に全体に手をかけて過保護 75%，あまり言わない 25%，第9表の子供の結果では，父親は干渉が多く，甘やかす 50%，不安があり，おこる 50%，，母親は過保護 50%，自信がない，つきはなす 50%，ここでも言えることは子供の目は案外公平で，親と子が一致しないのではなく，父親と母親と一致しておらず甘やかすにしても，拒否するにしても自信がなく不安がっている。

この B グループの4例の内2例は今だにアレルゲン検査で行なったものすべて陰性，その他の検査も陰性であるのに重篤な発作をやり返している。

A グループでは父親は懸命にきびしくしようとしていて，母親は自他ともに過剰に保護している。B グループは，父親も保護したり，不安がりながら拒否したり，母親も心配しながら拒否している。父親と母親とが，子供にどのように接してよいか，一貫していない。A, B グループで言えることは喘息児の親は過保護，つまり過剰な愛情と心配を子供に掛けているために，子供の性格が，依存的，非社交的，自信がないなど，子供の性格形成に大きな影響を与えている。

## VI 考察と結果

以上を考察すると，アンケート及びテスト結果の特徴から，喘息児は兄弟数は1~2人が多く，長女，長男，末子で，経済的にも恵まれていて，知能面も比較的高いが，根気が無など，性格的依存的な弱さが，影響を与えている。親子診断テストからは父母ともが過保護で，B グループのごとく，母親が子供を拒否していて，情緒的要素の十分に加わったものである。精神分析医の Friede Fromm-Reichmann が，“家族集団における母親の役割についての覚書”の中に「子供に与える母親の支配の影響は過剰に権威主義的な父親の愛情よりも，子供の情緒の発達によって，より有害である」とのべている。この点からも喘息の発作等に人間関係の問題点のあることを如実に示している。

近年喘息児の精神療法によって，治療された報告を多く見ることが有るが，喘息児のみ

でなく、身体と精神との境界的領域の小児の疾患に就いて、環境的要因、心理的要因である、情緒、性格、親子関係、兄弟関係（人間関係）に就いて今後更に研究を進めて行きたいと思う。

#### 参 考 文 献

- 1) 笠井 和著： 育児学，厚生閣。
- 2) 高尾健嗣著： 小児の神経精神医学，南山堂。
- 3) 木田文夫： 遺伝体質集，雄山閣。
- 4) 鯉沼節吾： 衛生学，金原書店。
- 5) 古賀行義訳： 母と子の関係の成り立ち，同文書院
- 6) フロムーライヒマン： 人間関係の病理学．誠信書房。  
早坂泰次郎 訳